

薪拾うて
居つたもの

お才あれ見よ

越後の國の

雁が来たにと

欺されて

彌彦山から

見た筑波根を

今は麓で

泣かうとは

「心細きに

出て山見れば

雲のかゝらぬ

山は無い」

お才

二

いかばかり分け迷ふらむ名に立てる春の霞の油を漕ぐ舟、お才のち人にそそのかさ

て落人となれるに

人は釣する浪逆の海の
霞に迷ふ舟の上
吾は木萱に心置く
二人連立つ落人の

お主に叱られ子にせがまれて

間に無き名を立てられし

子守の頃の撫髪も

離故亂さぬ頬冠

「小褙さりと」と

端折りて

邪魔な袂は

断たうか」

浅間の煙立つとは見えて

西は入日のくれぐれに

霜おく石に枕して

臥すも一夜の夢なれば

「端をくはへし

手拭の

下に洩るゝは

三日月眉か懐かしや

袖が長くば

手を上げ

背に廻して

結びやれ」

河原柳

さりとは柳の影ばかり
空行く月の澄める野に

年は七か九か

對の振袖ゆらゆらと

紅燃ゆる玉襷

同花笠しやんと着て

三日月匂ふ細眉毛

立てし計りにやさしくも
月を厭ひて朝顔の
花の面を背けつゝ

稍取上し前髪の

濡れし子は無からんに
花がかゝると夢に見た
少女が夢は現かや

囃の笛の音につれて

心躍らす唄さけば
月の兎にあらねども
たゞ踊りたうて跳ねたうて

秋風寒き野に立ち

お夏お七も踊るらじ
尾花が末に環をなして
かへす装束は白露に

嫁さ行きやるに
何々買おど

棹は九棹總桐箆笥
銀に金無垢着せうかお嬢様
朱塗の長持車に積んで
紋は漆の藤巴

ほんに嫁さ行きやるなら
買はんせ鏡

耻かしいとて泣いたお顔も
行くは厭ぢやと言つた駄々も
夢かあとなき春の夜の
枕ばかりが寫らうに

面影かくす綿帽子
幽しがらりよとわゝ扱
差いた口紅忘れても
酒に汚すな盃の

十七少女の細そり眉に
明けて剃刀當る時
淡きに馴れしあけまきの
絹紐の色は惜ひとも

巻繪の櫛の牡丹花の
花のお方と名に立ちて
映る燈の光もまどふ
帯は給子の八重廻

野水を憶ふ

鶉立つ野の空清み
西に聳ゆる富士の山

入日眩き光さして
うす紅に匂へれど

慰めも無き夕ぐれの
豊旗雲も消え行けば

馬草背負て歸り來る
少女の顔も幽かなり

思へば病みて小衾に
こい伏す友もつらからむ

瀬戸の内海風立ちて
鳴門の秋に鷗鳴く夜は

ちぬの浦曲

八重の潮路の沖つ浪
邊にたつ浪に誘はれて
ちぬの浦曲に友と
君が見してふ月かこれ

磯の眞砂を踏ならし
袂連ねて辿りし
影やうつると眺むれど

わが世の月は朧にて

須磨のみ寺の鐘の音を

数へ玉ひし係も

君が玉章讀みし夜の

月にもそれと見えざりき

寝ねで明し、獨ねの

夜の心を知りまさは

土産には過し浦々の

寫眞なりと有らましを

干潟漁りてみてづから

拾ひ玉ひし貝みれば

潮垂衣まだ着ぬに

をぞや袂に月照れり

厭はれざらば舵枕

君と重ねて住の江に

行きてもがむな岸遠く

晴れゆく月の影浴びて

妻かとの人の問ひし時
然りと對へ給ふとも
茅奴の浦わに坐す方も
美はし妻はおはすべし

諏訪の淡海の一葉舟
漕がせし夜半に月出で
隈なき光眺めしは

夢かと思ふ今なれば

花藻

矢部海軍大佐夫人を悼む

下這ふ野火の

薄煙

火中に立ちて

はしきやし

橋を

問ひにけむ

あづまは國の

名となりぬ

寝くたれ髪を

猿澤の

池の玉藻と

靡かせて

形見の衣

掛してふ

柳は今も

青かるに

新肌觸れて
寝ぬる夜の
夢暖かき
琉球の
島にはあらぬ
伊豆の海に
溺れし君が
涙はよ
岩に解れては

白玉を
延ばひし胸も
碎けけむ
花と匂へる
顔は
逆捲く浪に
沈みたり
舟隠れにし
沖にこそ

傾く月の
色牙ゆれ
骸は汀に
寄りぬるを
天驅りても
知るらんか

柔肌

昔メルシヤの伯、奇き政を布きていたく所領の民を疾ませし時、夫人切りに諫め参らせしかば、汝衣著けて馬に乗り市を行かば許さんと云ふに、餘りなりとは思ひ給ひしが、情深うおほしき性なりければ、終に裸體のまゝ馬上にてまぢくを歩ませ給ひきと聞きて、野水と共に作れる

潮風ぬるさ

春の海の

船おぼろめく

浪の上

有るか無きかに

照したる

月は千春の
夜を蹴りぬ

玉の御飾

襟に懸け

赤裳の裾を

地に曳いて

書堂にかゝる

裸體書は

背向過す

姫君の

七重の衣

解き棄て

遮ふ影無き

柔肌を

駒の足掻の

幾返

めるしやの街に

曝しけん

乗るは現か

火の鞍に

現世の姿は

忘るも

錦の帳

奥深く

綾の褥に

居馴れ

孔

星薄れ行く

朝ぼらけ

人目耻しき

姿見に

寝亂髪を

搔上とて

紅潮し

君なるを

宮に歸りて

脱ぎ置し

衣の亂れを

手にとりて

失はれたる

色見れば

涙は頬をも

濡らしけん

夢静なる

手枕に

觸るゝを許す

妻ならば

蜂舞ふ園の

花にすら

一人行くをも

許さくらんに

二十八宿

明治四十年四月五日印刷
明治四十年四月五日發行

不許
複製

著者

橫瀬夜雨

發行者

東京市京橋區五郎兵衛町三十二番地
金尾種次郎

印刷者

東京市京橋區新地三丁目二十番地
河本龜之助

印刷所

東京市京橋區新地三丁目二十一番地
株式會社國光社

發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町
金尾文淵堂

二十八宿
金五拾錢

文淵堂發兌圖書賣元

東京市神田區表神保町
 東京市神田區裏神保町
 東京市日本橋區吳服町
 東京市京橋區尾張町
 東京市京橋區中橋廣小路
 大阪市東區南波邊町
 京都市島丸佛光寺東入
 久留米市米屋町
 名古屋市宮町一丁目

東京堂書店
 上田屋書店
 北隆館書店
 東海堂書店
 前川文榮閣
 杉本書店
 東枝律書房
 菊竹金文堂
 星野文星堂

文淵堂圖書要覽

(振替口座 三八二七)

宗教書類

網島 病間錄 (五版) 定價金壹圓 小包料十錢	網島 病間錄 (五版) 定價金壹圓 小包料十錢	網島 回光錄 (病間錄第二篇) 定價金壹圓 小包料十錢	編輯局 病間錄批評集 (再版) 金廿五錢 郵稅四錢	網島 見神論評 (新刊) 金七十錢 郵稅八錢	中村 舊約物語 (新刊) 金壹圓五十錢 小包料十五錢	中村 新約物語 (三版) 金壹圓 小包料十錢	春雨 新約物語 (再版) 金十二錢 郵稅二錢	春雨 新約物語 (再版) 金十二錢 郵稅二錢
清澤 懺悔錄 (新刊) 金七十錢 郵稅八錢	清澤 懺悔錄 (新刊) 金七十錢 郵稅八錢	海老名 靈海新潮 (再版) 金八十錢 小包料十錢	智海 支那佛教史 (再版) 金七十錢 郵稅八錢	浩々洞 沈思錄 (近刊) 金四十錢 郵稅六錢	清澤 滿之全集 (近刊)			

科學及雜著

五十嵐力	兒童之研究	(新刊)	金壹圓
朝倉無聲	日本小說年表	(再版)	金壹圓
木下尚江	懺悔	(四版)	金卅五錢
安部磯雄	理想の人	(三版)	金七十錢
山路愛山	社會主義管見	(新刊)	金三十錢
浩々歌客	鷗心錄	(近刊)	未定

小説書類

木下尚江	靈か肉か	(近刊)	未定
木下尚江	火の柱	(五版)	金卅五錢
木下尚江	良人の自白	(十版)	金卅六錢
二葉亭譯	うき草	(近刊)	未定
中村春雨	無花果	(十版)	金七十錢
中村春雨	密航婦	(新版)	金七十錢
中村春雨	炬火	(近刊)	未定
中村春雨	犯さぬ罪	(近刊)	未定
中村春雨	雛	(品切)	

脚本演劇書類

草野柴二	モリエル全集	(近刊)	紙數千
巖谷小波	喜劇七草	(新刊)	金八十錢
佐野天聲	不死の誓	(新刊)	
室田武里	無線電話	(近刊)	未定

菊池幽芳	妙な男	(全二冊)	一冊六十錢
菊池幽芳	秘中の秘	(近刊)	未定
菊池幽芳	七日間	(品切)	
柳川春葉	縁の糸	(新刊)	金六十錢
須藤南翠	間一髪	(新刊)	金七十五錢
大倉桃郎	琵琶歌	(四版)	金六十錢
大倉桃郎	舊山河	(再版)	金六十錢
佐野天聲	露の曲	(新刊)	金六十錢

詩集書類

薄田 白 羊 宮 (新刊) 小包料十錢	薄田 白 玉 姫 (新刊) 郵稅八錢	薄田 童 子 守 唄 (近刊) 未定	薄田 行 く 春 (品切)	薄田 暮 笛 集 (三版) 郵稅四錢	鐵幹晶 毒 草 (三版) 郵稅六錢	河井 塔 影 (新刊) 郵稅六錢	高安 寢 覺 草 (新刊) 郵稅八錢	月郊 二 十 八 宿 (新刊) 郵稅六錢	橫瀨 夜 雨 (新刊) 郵稅六錢
---------------------	--------------------	--------------------	---------------	--------------------	-------------------	------------------	--------------------	----------------------	------------------

一色宗教頌

榮 (新刊) 郵稅六錢

岩野 泡 鳴 詩 集 (新刊) 郵稅六錢

野ミラ 口 劍 と 戀 の 日 本 (品切)

歌集書類

與謝野 夢 の 華 (新刊) 郵稅六錢	與謝野 亂 れ 髪 (四版) 郵稅四錢
---------------------	---------------------

與謝野 小 扇 (三版) 郵稅四錢

晶子 戀 衣 (四版) 郵稅四錢

與謝野 むらさき (品切)

晶子 黑 髮 (新刊) 郵稅四錢

野口英 米次郎 譯 百 人 一 首 (近刊) 未定

筆蹟及畫集

子規 俳 人 芭 蕉 (木版) 小包料十錢

自筆 眞蹟 俳 諧 三 十 六 歌 仙 (木版) 小包料十錢

中澤 弘光 水彩 富士 十二 景 (全四册) 小包料各十錢

三十九 年 度 白 馬 會 紀 念 畫 集 郵稅不 要

小林 萬 吾 風 景 水 彩 畫 帖 (木版) 郵稅不 要

月刊書類

島村抱 月 主 幹 早 稻 田 文 學 每月一回 郵稅一錢五分

三宅雪 嶺 主 幹 日 本 及 日 本 人 每月二回 郵稅一錢五分

丸山晚 霞 主 幹 水 彩 畫 講 義 錄 每月一回 郵稅不 要

一色白浪作 中澤弘光畫

(二十八宿の姉妹集)

宗教頌榮

口繪木板畫入美本
全一冊定價四拾五錢
郵送料金六錢

著者のはしがき

▲宗教と文學の調和など云はひは我れにありて餘りにこちたき業なれど而も歌と祈はわが一日もなくて叶はぬもの也▲人間悟れば詩なしと云へるは既に聞きし所也されば宗教が藝術に近づく程そが光を失ふとし思へる人もやあらん只わが心に二つのものは即ち一なり。わが歌はやがて祈りにして祈りは即ち詩也そはわが宗教は所謂心の悟りにあらずして魂のわがこがれなると共に藝術は藝術の爲と云ふ事も我解き能はぬ所なればなるべし▲わが見る所誤まれるか世の人の疑ひ當れるかいはあれ此解決は各自の心に覺る日あるべく又進みて之を説かん人も乏しからざらん我今この小冊子を旨としてわが教會の爲に編む事とせり神若し許し玉は、他日更らに文壇に捧ぐべきものをも得べしと信ず。(下略)

發兌元

東京京橋區五郎兵衛町

金尾文淵堂

日本及日本人

毎月二回一日十五日發行
四六二倍形每號百頁餘
口繪寫真版及木版數面入
一冊十五錢郵稅一錢五厘
半年一圓八十錢、一年三
圓六十錢(郵稅を要せず)

「日本及日本人」は雜誌「日本人」の改題にして、前「日本人」は彼の日刊新聞「日本」と系統を同うし、三宅雪嶺氏之を主幹して其一貫せる主義主張 政治、教育、文藝の諸方面に一派の權威たりしが、明治三十九年末、日刊「日本新聞」の新社長、多年の主張を傷け面目を汚すや、雪嶺氏以下廿二名の記者憤然連袂退社して「日本新聞」を廢滅に歸せしめ其特長の一切を擧げて雜誌「日本人」に併せ此に「日本及日本人」と改題して發行せらるゝに至りたる也、今内容の一斑を言へば、雪嶺氏の原生界及副生界は數十號に亘る哲學上の大文字にして、古一念氏の人物評論、國分青崖氏の評林亦常に異彩を放つもの、巻初には東西南北と題する獨特の政治評論あり、其他日本俳句は子規氏創設の最高句府を舊「日本」より茲に移せるものにして現在高濱虛子氏之を選し、河東碧梧桐氏の一日一信は氏が三千里旅行の通信にして趣味津々たり、猶改題と共に内藤湖南氏は政治論を、角田浩々歌客氏は文藝評論を新に來り受持たれ、又毎號各大家の執筆に係るものは號毎に光景を變へ面目を新にし來りて讀者に見ゆべく豊富多趣の内容一々擧げて謂ふに遑あらず。

早稻田文學

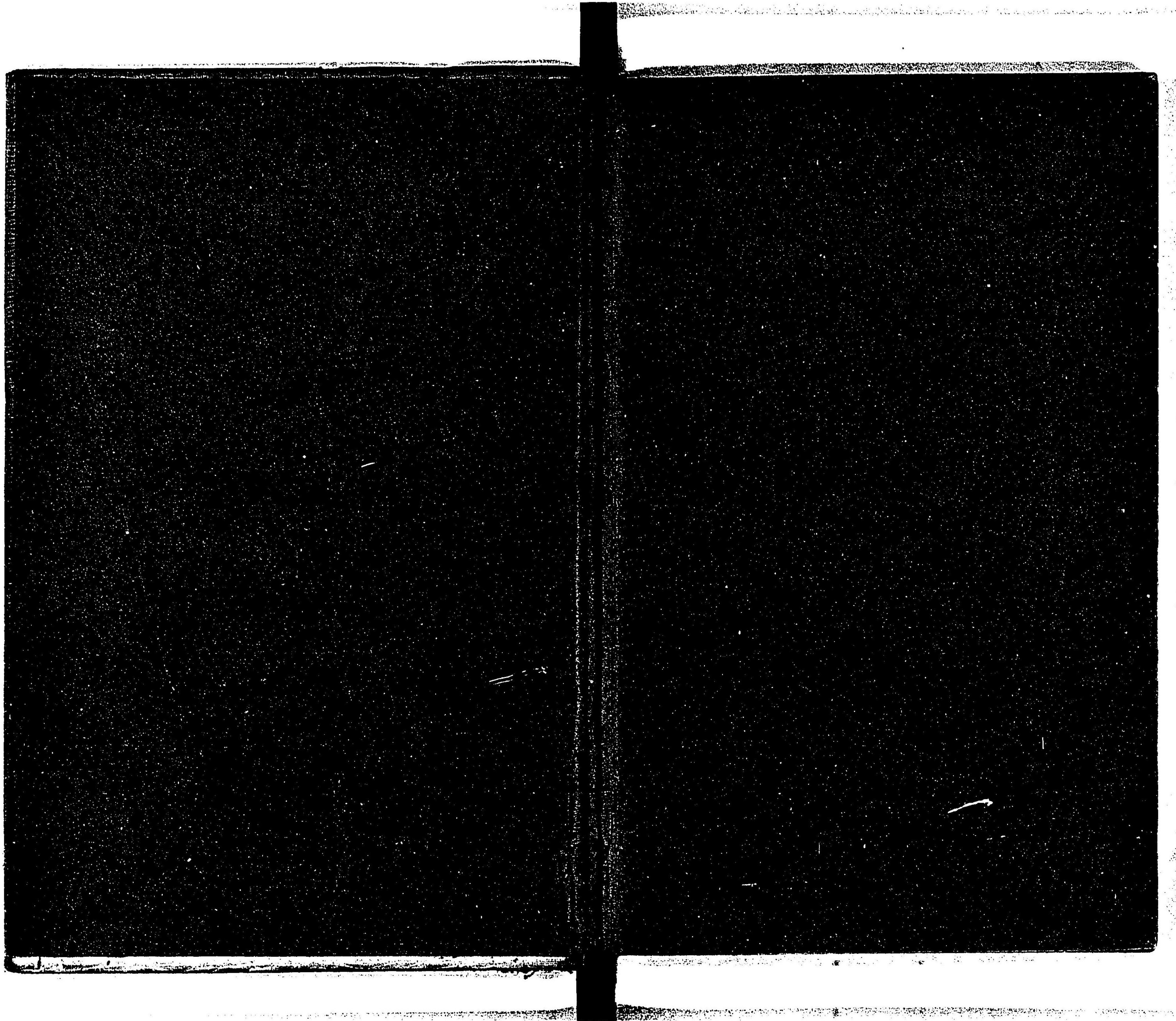
編輯所 東京牛込區藥王寺前町廿番地
東京牛込區中町三十五番地
文藝協會事務所
○每月一回二日發行二冊廿錢郵稅一錢半
○一年前金二圓四十錢(郵稅不要)

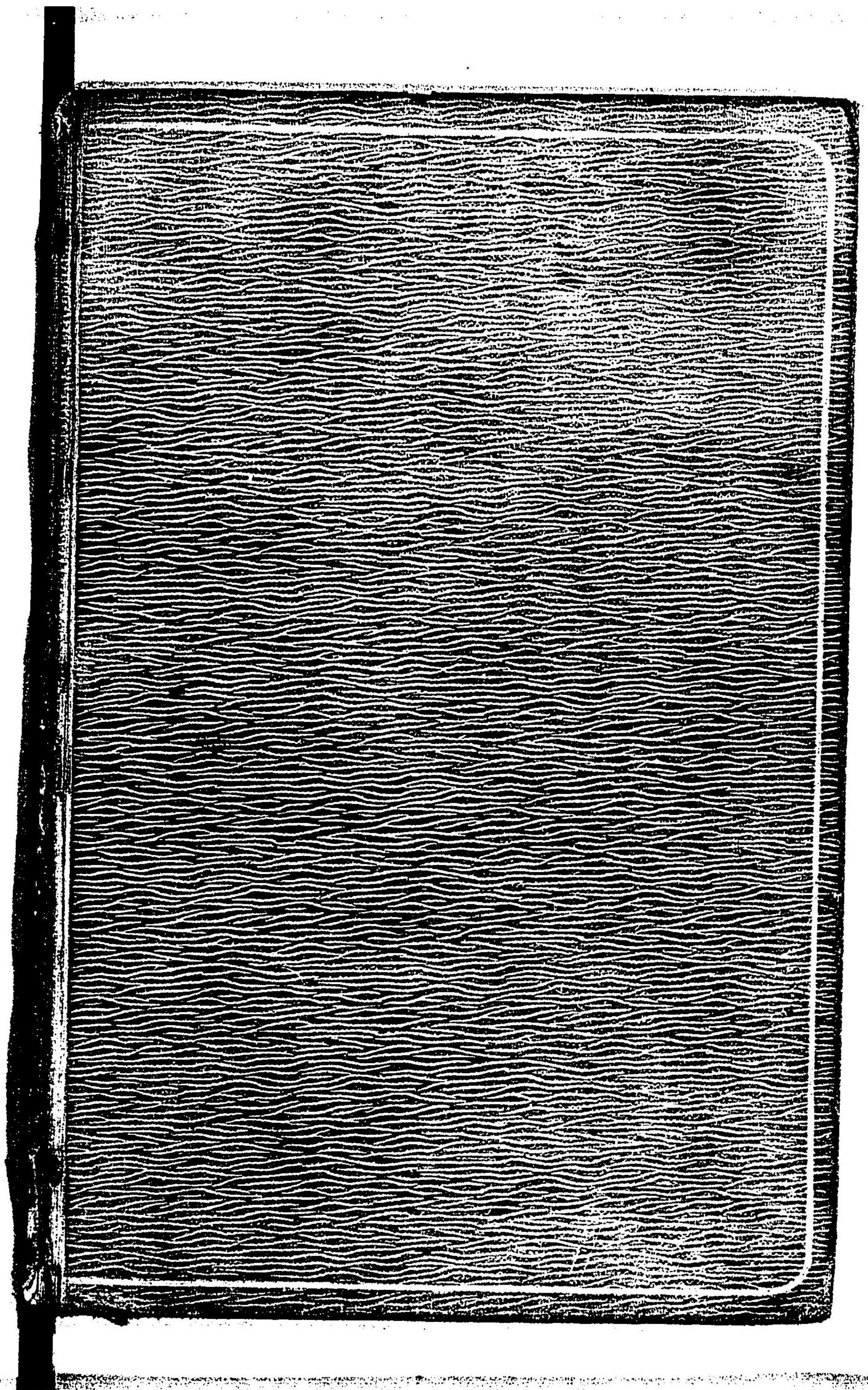
一本誌は元坪内逍遙氏主幹の下に七年間文壇の重鎮たりしもの、一旦刊の後明治三十九年一月新なる希望と抱負とを以て再興せられたるものなり。
一本誌は文學、美術、演藝、宗教、哲學、史傳、風俗、各方面の評論及び小説、詩歌、脚本等の創作、翻譯を文壇の新舊諸派にわたりにて、選抜採録すると共に、毎號卷頭には數十頁の長論說若しくは創作翻譯等の完結せるものを載せ、是而已にても優に一冊の著書たるに足るの面目を具へしむ。
一本誌の彙報欄は文藝教育諸方面の現状を彙集し評拆して精博公平穩健を旨とし文壇の趨勢をして一眸の間に去來せしむ、是れ本誌の擅場なり。
一本誌現在の主幹者は島村抱月氏なり。
一本誌は文藝協會と聯合し之が機關として文藝の實際方面に活動する外、採録する所の文章には何等の偏したる標準をも挾むことなし。

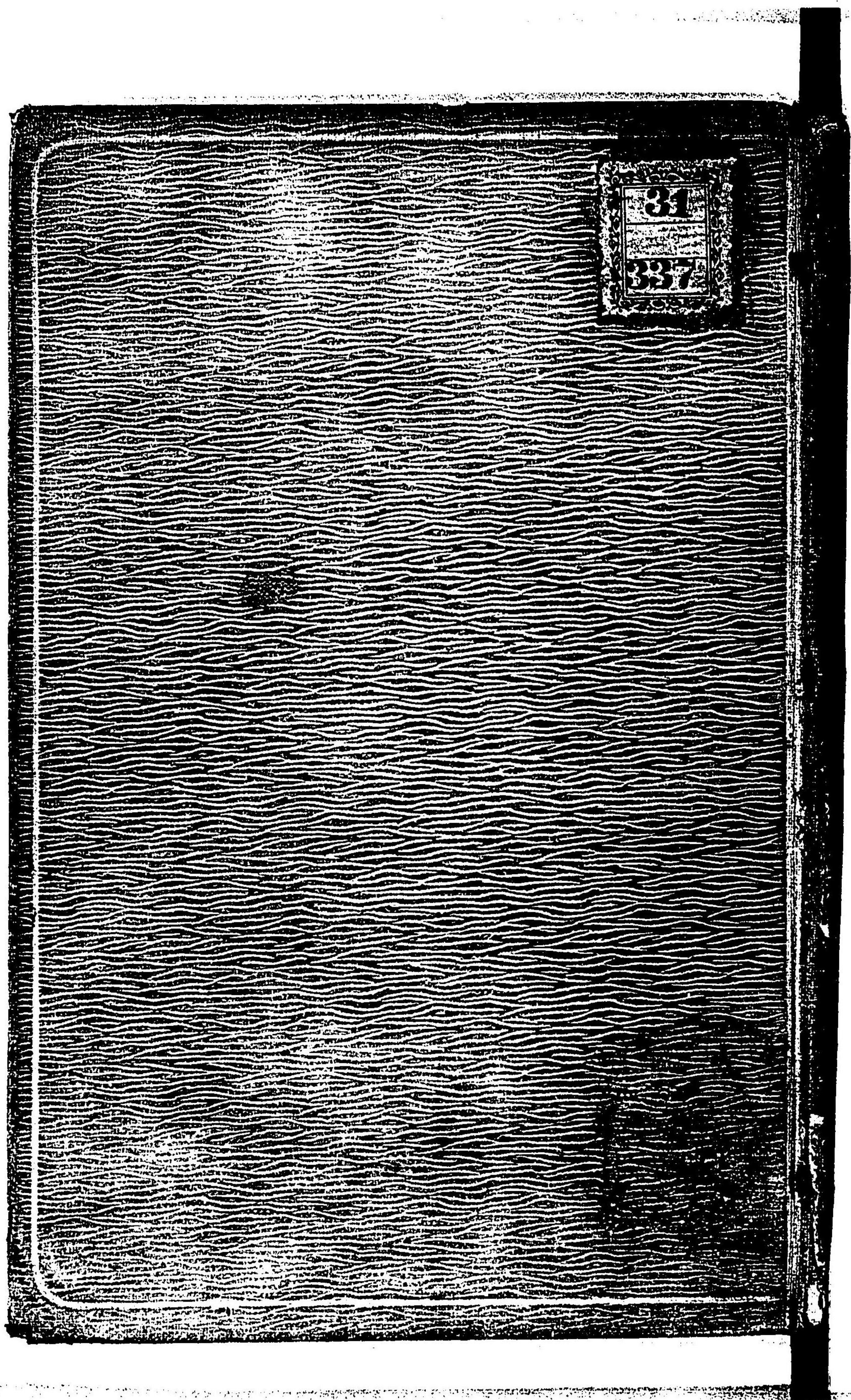
發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地

金尾文淵堂







088072-000-8

31-337

二十八宿

横瀬 夜雨/著

M40

DBG-0169



